

混乱を極めた首班選び

盛田 常夫

ジュルチャーニイ辞任表明から1ヵ月。漸く、ハンガリーにバイナイ・ゴルドンを首班とする政府が樹立された。6名の専門家を大臣に据えた危機管理内閣は、次期の総選挙まで、緊縮政策を軸とする危機管理政策の実行に入る。

二転三転の候補者選び

3月22日にジュルチャーニイが首相の座を譲ると宣言してから、社会党幹部会で首相候補の絞り込みが行われた。首相交代で政権の延命を図るためには、SZDSZの支持を得られる候補者でなければならない。数日後に幹部会が決定した候補は3名。シュラーニイ元国立銀行総裁、ヴィルテシュ GKI 会長、グラッツ元科学アカデミー総裁の3名である。シュラーニイは前評判が高かったので理解できるが、ヴィルテシュ指名には多くの人が首をかしげた。社会党に極めて近いエコノミストで、ポシュタバンクのスキャンダルにも深くかかわっていたことで知られる人物である。筆者とも旧知の仲だが、首相に適役とは言い難い。グラッツは社会党の教育大臣を務めたことがあるし、改革同盟に名を連ねた知識人として首班の資格はある。しかし、今次の国際的な金融危機の中で、歴史学者が政府首班では国際的なインパクトに欠ける。

案の定、SZDSZとの交渉はシュラーニイを中心に展開した。国際金融界で名が知られるシュラーニイであれば、SZDSZとしても文句はない。シュラーニイはすべての国会会派の支持を首班引き受けの条件とした。与党のみならず、最大野党の FIDESZ の支持を得なければ、今次の危機は乗り切れないと判断したシュラーニイは、オルバンとの会談を終えてから首班指名を受け容れないことを決断した。その会談で何が語られたのかは分からない。FIDESZ が社会党政権の延命になる新首班選定ではなく、繰り上げ総選挙の実施を要求しているから、シュラーニイを推す訳にはいかない。もしかしたら、オルバンは「高々1年の首相の座に就くより、FIDESZ 政権で首班に指名される方が良いのでは」と語ったのかもしれない。オルバンにそれだけの度量があればたいした政治家だが。そして、グラッツもシュラーニイに習い、首班指名を自ら断った。これでジュルチャーニイと社会党幹部会が主導する候補者指名は行き詰まってしまった。

困った社会党幹部会はほとんど名前が知られていない実業家と指名交渉するなど混迷の度を深め、他方で SZDSZ からはボクロシュでどうかという逆提案がなされた。この時点でボクロシュは首相の座への色気を示していたが、ジュルチャーニイ初めとする社会党幹部がボクロシュ指名はないと断言してから、ボクロシュ自身も今次の首班指名争いには加わらないと宣言することになった。

社会党がボクロシュを嫌う理由は幾つかある。一つは政治的野心があるから、社会党のコントロールが効かなくなる恐れがある。二つは社会党政権時代のボクロシュの振る舞い

に、社会党幹部会が翻弄されたという苦い経験である。何度も蔵相辞任表明で社会党幹部を困らせただけでなく、強面一方で対話ができないという評価が生まれた。こういう扱いにくい人材を首相に指名できないというのが社会党の大勢だった。とくにジュルチャーニイはボクロシュを嫌っている。自分と同じような政治的野心を見透かしているからかもしれない。こうして、社会党の次期首相選びは振り出しに戻った。

ジュルチャーニイの党首辞任

ジュルチャーニイのシナリオははっきりしていた。首相の座は降りるが、社会党の党首として睨みを聞かせ、やがてチャンスがやってこれば、再び再登板ということもあり得る。今は、社会党と自分が一步下がって、専門家内閣を表に立ててやれば、社会党の人気回復に結びつくかもしれない。

しかし、首班候補選定が行き詰まり、社会党内部が動き出した。社会党内部にはジュルチャーニイの専制支配に不満を抱いているグループや政治家が存在している。ジュルチャーニイはその素早い行動力、豊富な資金を使った人身掌握術、ポスト配分による懐柔政策や敵対の可能性のある政治家の無力化などを駆使して、若くして百戦錬磨の政治家を抱える社会党のトップに座った。そのジュルチャーニイにたいして、「首相を辞任するなら、党首も辞任すべきだったのではないか」という激しい批判が、地方の党委員長などから浴びせられることになった。これはジュルチャーニイが初めて経験する内部からの批判である。

このような反撃に遭い、ジュルチャーニイは自らのシナリオを修正せざるを得なくなり、社会党党首からも降りることを決意したのである。3月22日の社会党大会で、85%の信任率で党首に再任されたばかりである。それから1週間も経ないうちに、党首辞任表明となった。社会党の末期的症状ともいべきドタバタ劇が展開された。

社会党幹部会では首相候補選定と並行して、党首の後任選びの激しい議論が展開された。ジュルチャーニイは経済大臣のバイナイ・ゴルドンを首相後継に指名し、社会党幹部会はそれを受け容れたが、党首の後任選びは簡単には決まらなかった。副党首のキシユ・ピーテルとセケレシュ・フェレンツがともに後継党首に名乗りを上げた。しかし、ジュルチャーニイはセケレシュの面前で、「セケレシュには党首の資質はない」と批判するなど、厳しい議論が戦わされたようだ。結局のところ、キシユとセケレシュが下りて、国会議員団長で弁舌にも優れているレンドヴァイ・イルディオを後継党首とすることで決着したが、幹部会内の激しい議論はしこりを残すものとなった。他方、レンドヴァイはキシユとセケレシュを副党首として指名することで、幹部会内の関係修復を図ろうとしている。

こうして、バイナイの首相指名、レンドヴァイの党首指名が決まった。

繰り上げ総選挙の絶対回避

首相候補者が次々と断りを入れる中、ショーヨム大統領は「現内閣を不信任して、新たな首班のもとに新しい内閣を樹立することは、憲法に違反するものではないが、可能な選

択肢の中で、もっとも民主主義的度合が低い」と表明することになった。これで、社会党や SZDSZ の内部からも、「この混乱を収めるには、最終的に総選挙しかない」と主張する議員も出てきて、「繰り上げ総選挙」という選択肢がクローズアップされてきた。

しかし、社会党と SZDSZ とって現時点の総選挙は絶対に避けなければならない。今の状況で選挙をやれば、社会党議員は三分の一以下に減り、SZDSZ は議席を失い、FIDESZ は三分の二以上の絶対過半数を獲得することは確実である。これだけは何としても避けなければならない。それが社会党と SZDSZ 幹部の共通の危機意識である。

最後の候補として社会党幹部会がバイナイを指名した時に、即座に SZDSZ 幹部は基本的な同意を与えているのも、この危機意識を共有しているからである。表向きは、「バイナイの政策を確認し、かつ社会党が正式にバイナイを首相候補として決定するまでは、最終的な同意はできない」と表明していたが、SZDSZ はバイナイで構わない。

逆に、社会党がはたしてバイナイを党大会で首相候補に決定できるかどうかに関心が移った。というのは、バイナイが首班指名受諾の条件として提示した政策は、これまで社会党が受け入れを拒否してきた改革同盟の政策とほとんど同じだったからである。

バイナイが提示した政策は、13ヶ月目の年金支給廃止、公務員の13ヶ月目のボーナス凍結、育児補助受給の厳格化、年金受給年齢の連続的引き上げなど、ほんの少し前まで社会党が拒否してきた政策である。

4月5日の社会党大会は、バイナイの首相指名を93%の支持率で、レンドヴァイの党首指名を91%の支持率で決定した。国会議員の残りの任期が最長で1年とはいえ、とにかく最後まで政権を維持するために、これを受け容れる他に方法がないということだ。社会党にはもう政策の是非を議論している余裕がない。この選択がどのような有権者の反応を呼ぶか、ジュルチャーニイの専制支配から解き放たれた社会党がどのようなイメージチェンジを図ることができるか。ともかく、新体制で難局に向かうことになった。

MOL 株売買をめぐる怪奇

野心家ジュルチャーニイが簡単に首相と党首の座を降りたのち、聞き捨てならぬ噂が流れている。転んでもただ起きないジュルチャーニイのことだ。何を考えているのか分からないと勘ぐられても仕方がないだろう。

ハンガリーの政界が首相選で混乱を極めている最中に、オーストリアのガス・石油公社 OMV が保有していた MOL 株 21.2%が、ロシアの石油・ガス会社スルグニェフチェガス (Surgutneftegas) に譲渡された。それも市場価格の2倍の値で。2007年に OMV が MOL 株の買い占めを始めた時に、OMV 自身が本当に MOL を子会社化したいのか、それとも第三者の依頼で MOL 株取得に動いているのではないかと詮索された。この買収劇の中で、2007年秋のハンガリー国会は MOL 買収を阻止する lex MOL 法を採決して大きな話題になったことは記憶に新しい。今回、プーティン政権が深く絡んでいると言われるロシアの石油・ガス社が OMV 保有の株式を購入したことで、やはり OMV による MOL 株買収は

最初からロシアの依頼だったのではないかと勘ぐられている。というのも、OMV がスルグネフチェガス社から得た株式売却額の 140 億ユーロは、OMV が 2 年前に MOL に提示した額とまったく同じだからである。

さて、このロシアの会社であるが、原油採掘・精製でロシア第 4 位、石油会社としては最大量の天然ガスを扱う会社でもある。もっとも、ロシアの天然ガスの 80% はガスプロムが扱っており、スルグネフチェガス社が扱う量はロシア全体の 1 割にも満たない。当然のことながら、ガスプロムとは深い関係にある。ガスプロムはプーチン政権の財政基盤だが、実はこのスルグネフチェガス社もプーチン政権を支えている企業であると言われている。これらロシアの会社の所有構造は会社の年次報告をみただけでは皆目分らない。ロシア証券市場に上場されており、アメリカ市場でも ADR（米国預託証券）が売買されている企業だが、そのことは所有構造の透明性とは何の関係もない。タックス・ヘイブン地に登記された正体不明の会社の所有になっているから、外からでは実際の所有者が見えない。ほとんどのロシア企業はこのようにして真の所有者を隠している。今回の MOL 株取得はプーチン政権とガスプロムの意向を受けた行動であることは間違いないだろう。

しかし、この時期に、このロシア企業が何故 MOL に関心を示すのか。それには十分な理由がある。一つは、MOL が所有する巨大な天然ガスの貯蔵施設である。ウクライナとの紛争以後、このハンガリーが所有するガス貯蔵施設は、ガスプロムにとって喉から手が出るほど欲しい宝になった。もう一つは、将来の欧州へのガス供給ラインへの懸念である。

現在、欧州への天然ガス供給の将来計画は、EU が主導するナブッコ計画とロシアのサウス・ストリーム計画がある。ナブッコ・パイプラインはトルコ、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、オーストリアを経由するパイプライン構想で、いわばロシアを回避したルートである。これにたいして、ガスプロムが主導するパイプラインはロシアからブルガリアに入り、そこからイタリアへ向かうルートとルーマニア・ハンガリーを経由して西欧に流れるルートに分かれる。ハンガリーはこの両方の計画に噛んでおり、西欧への重要な経由地になっている。ロシア＝ウクライナ紛争によって、EU はナブッコ計画の前倒しを考え始めた。ガスプロム、いやロシアにとってナブッコ計画が進展することは、サウス・ストリーム計画の収益性に甚大な影響を及ぼす。西欧にとって複数のパイプラインが並存することはきわめて有利な交渉的地位を保障するが、その分だけロシアは痛手を受ける。

こうした事情からロシア政権の命を受けた巨大石油・ガス企業が、中東欧の石油・ガス企業に触手を伸ばしている。将来パイプラインの交渉上の機密を取得する上でも、交渉上の優位性を確保する上でも、中東欧の中核企業を手中にできれば万々歳なのだ。とりわけ、ハンガリーは二つのパイプラインの経由地となるから、MOL を押さえることが戦略的にきわめて重要なのだ。

ここからがジュルチャーニイの出番である。ジュルチャーニイ政権は MALEV 航空をロシア企業（現在はロシアの銀行）に売却したり、ロシアのパイプライン構想を積極的に評価したりしてきたことから、プーチン政権とは蜜月の関係にある。ジュルチャーニイが

フリーになれば、ロシアが提供できる格好のポストがある。スイスに拠点を置くサウス・ストリーム AG というパイプライン構想をマネージする会社である。この会社のトップのポジションは政治家のために空けられている。ロシアはイタリアのプロディにこのポストを打診して断られた。「それならばジュルチャーニィを」というのが、ロシアで流れている噂である。

世間の常識で考えれば、こういう破廉恥な転身は考えられないが、厚顔無恥の政治家であれば、このような転身に倫理的な障害などありはしない。事実、ドイツのシュレーダーがその良い事例である。在任中からロシアとの癒着が囁かれ、退任と同時にノース・ストリームの開発を担当するガスピロの子会社（ノース・ストリーム）の役員に就任し、年間何百万ドルの巨額の報酬を得ている。ここには左翼も右翼もない。まさに金と権力のみが判断基準である。左翼は人を欺く外套に過ぎなかった。ジュルチャーニィがシュレーダーと同じ道を辿っても誰も驚かないだろう。ただ、これが実現すれば、ハンガリーの社会党は「祖国裏切りの党」として、長期にわたって政権を奪取する機会を失うだろう。

首班指名混迷の裏で、別のストーリーが進行している。その成り行きにも注目したい。